

ダ・ガンバ

国電の中からふいと見ると
そこにはベンチがあった
誰も居なかった
明るい陽光の中なのに

街は幼な子に満ちていた
美しいツツジの花壇の向こうに
小さな叫びをはしゃぎながら
穏やかな光の粒子のただ中で

いのち
生命もなく

存在もなく
僕は歩いていた
よそ見をしながら

新緑の眩しさが足元の影を濃くし
くっきりと
そして涼しく
アダージョを漂わせるのだった

ビルの下を、そして初夏の下を
人は美しく生きるのだった
眩しさに掌をかざしながら
眩しさに目を細めながら

ああ、風などあったろうか
あったにはしても
この光の粒々を吹き払うほどだったろうか
ああ、息をしよう

ああ、かすれた世界
ああ、マシュマロのような肌触り
うつむくような
つば広の帽子のような
目を伏せるような・・・

僕は呼ぶだろう
気恥ずかしげに
全ての幼い子らを

(1987.4.23)